

# 知的障害特別支援学校高等部におけるキンボールの取組

○榎並 浩

坂井 聡 西田 智子

(香川大学教育学部附属特別支援学校) (香川大学教育学部)

KEY WORDS: 知的障害特別支援学校高等部, キンボール, 協働

## 1 目的

必要とする支援の異なる生徒たちの協働的授業実践においては、すべての生徒が学習への意欲と成就感をもつことができる授業づくりが課題である。

本研究では、参加者の年齢や経験、体力などの実態に応じてルールを変更することが認められている「キンボールゲーム」を知的障害特別支援学校高等部の保健体育の授業の題材として導入し、協働的な学びの実践を中心に支援方法について検討することを目的とした。

## 2 方法

### (1) 対象生徒

高等部 1～3年生男子5名、女子3名の計8名の生徒を教員4名で指導した。本グループの生徒の全員が卒業後は福祉就労をめざす。キンボールについては、自分でボールを捕ったり、力を入れて打ったりすることができる生徒から、周りの支援がなければ捕ったり打ったりすることが難しい生徒まで実態差は大きい。動きの速さや動ける範囲についても、ボールの動きを見ながら素早く動くことができる生徒がいる一方で、ボールへの関心が低く自分から動くことが少ない生徒や、一人では動きづらい生徒もいるなど実態は様々である。

### (2) 指導期間

X年12月～X+1年2月

1回45分 週1回 計11時間

### (3) 指導目標について

本單元における指導目標は以下の二つである。

- ・キンボールの特性を知り、ボールを捕ったり打ったりすることができる。
- ・自分の役割を果たしたり、仲間と声を掛け合ったりして活動に取り組むことができる。

### (4) キンボールの特徴と実態に応じたルール変更

「キンボールスポーツ・コンペティションゲーム（以下キンボールゲーム）」は、1チーム4人で構成された3チームが、直径112cm、重さ1kgの大きなボールを使い、サーブやレシーブを繰り返しながら、そのボールを床に落とさないようにチーム全員で協力し、得点を競っていく競技である。使用するボールは、他の競技で使用するボールに比べて極端に大きいため、ボールに注目しやすく、滞空時間も長くなることから、機敏に動くことが難しい生徒にとっても取り組みやすい。この利点を生かし、キンボールゲームの特徴を取り入れながら、生徒が楽しんで取り組めるものとして「キンベースボール」を独自に考案した。本来3チームで行う競技を野球のように守備と攻撃の2チームに分け、攻守に対する準備をしっかりとすることができるように、ワンプレイごとにゲームを区切るようにした。また、ボールを全員で保持することが意識できるように、ボールを保持してから3カウントを数えるようにした。さらにボーナスポイントボックスを設置して、そこまで協力して運ぶことで得点が増える楽しみができるようにした。

### (5) 生徒同士の協働を促すための工夫

準備場面のチーム分けにおいては、あらかじめチーム分けをしておくのではなく、準備係の一つとしてチーム分けの担当になったメンバーで話し合いをして決めるようにした。

条件として、前回と同じチームにしない、できるだけ力が同じようになるようにする、ということを示した。

練習やゲームの場面においては、「ボールを落とさない」という目標で、ペアになってボールを運ぶ活動を取り入れたり、ゲームでの守備位置を内野と外野に分けたりすることで、生徒同士で協力する場面を多く設定した。また、いいプレーが出たときにはチームでハイタッチを交わしたり、友達にいい声掛けや関わりをしたりしているときにはすぐにシールを渡して即時評価するようにした。

## 3 結果

### (1) 協働的な学びで深めたい目標の到達度

生徒8名のうち4名を抽出し、指導者で話し合いを行い、協働に関する評価基準を設定した。題材開始時と終了時の授業のビデオを基に10名の指導者で評価を行った。評価基準及び評価結果は以下の通りである。

- A: 仲間や指導者からの声掛けに応じて、考えや動きを修正することができる。
- B: チームの仲間の動きに合わせて、自分から動くことができる。
- C: チームの仲間と協力して取り組み、ハイタッチなどで頑張りを共有することができる。
- D: チームの中の自分の役割を意識して、自分から動くことができる。

	A	B	C	D
	始 終	始 終	始 終	始 終
目 標	△ ◎	○ ◎	△ ◎	△ ◎

注) ◎:一人で行える ○:手掛かりを用いて

△:教師の直接的な支援で ×:できない

### (2) 生徒の協働に関わる変容

- ・Aは、チーム分けを話し合う場面では、自分が同じチームになりたい人と組もうとすることが多かったが、友達の意見や指導者からの助言を聞きながら、二つのチームが同じくらいの力になるように考えてチーム分けをできるようになった。
- ・Bは、ボールに対する意識が高まり、ゲーム中に固まることが少なくなった。「オムニキン」の音が掛かると腰を落として構えることができるようになった。
- ・Cは、ゲームで得点したときに、自分からハイタッチをするなど、友達とうれしさを共有することが多くなった。
- ・Dは、ゲームのときに、ボールへの集中力が高まり、声を掛けなくても自分からボールに素早く近寄っていくことが増えた。

## 4 考察

正式のキンボールゲームのルールでゲームに取り組むことが難しい本実践の対象生徒において、ルールを変更し「キンベースボール」にすることで積極的に自分から動く姿が見られた。これは、協働ということイメージすることが難しい生徒にとっても、協力する必然性が分かりやすい課題設定にしたためと思われる。また、動きだけでなく、声掛けや関わりなどに対しても即時評価をすることで、意欲が喚起され技能の高まりや協力の意識の高まりにつながっていったと思われる。

(ENAMI Hiroshi, SAKAI Satoshi, NISHIDA Tomoko)